キ
9
3448
1

ロ9
3448
1-5
門ロ9
3448
1

和語陰隲 新鑑草

凡古今の忠臣孝子貞女烈婦乃潔志德行遂ふ天地眞淳の蒙り〜事と又た孔臣賊子姦婦淫女の暴悪濫行なる終に陽罰の報を得〜事ともを並擧て徧く人々に陰德を勧む世教〜一端をも小補すべし〜云

浪華書坊崇高堂刊

摂津本五 木村屋

新鑑草序

人以天地為心則思有邪哉矣今我試問為惡者天惡之來也何處邪蓋不有天地之心也苟莫天地心者毎〜人心耳人心危豈與世應立必覆之道矣其謂危者以為私心私心焉能為天地之心天地將以無私心至而大至而滅所謂心僅有欲則羣邪衆惡如影隨如響應豈最不慎哉一日友人光風子訪來就坐寒暑相語古今交談亟壺花月雲水之人亦實為當時良巧

詰士彼素以有書癖爲敎人相傚編述其意志亦勝也而談話及闌自袖中出一帙問余予執觀之古今報應人事好惡廣記備載爲九号蔵世之無賴不狀者可謂仁心矣而剞劂氏登梓公天下噫世之幸哉矣竟以此言塞責人之索云時寛永第八年正月穀旦書知止齋之南軒

洛遊隱儒　雪巖散人灌記

序

天下に知を放てい道あり。そしを學ぶこゝ人ゝ志ゝ有るい敎なり。其ゝ所ゝ口に解ずを曷く。心よ得ゝ為ゝ行ずい能ゝ小能し。而道をもる者い福をゝ禍ゝ小樂。そ紙うゝ者い禍る孫まなびゝ古ゝ知ゝゝといゝ。惟懼るべきそ天道慎べきい人たゝゝに或人新奇乃小說を拾ひく。彰鑑中

少し発ち事ハ幼稚愚蒙の人の為ハ
第ずそこをおそれよすがとなるべきハ
とく〻ゴの虎巻をたきて道よ
者しばそこゑゆへ嗚呼為人のこの我
みゑかまるハ又字うの日代事よこをを

寶永八年

孟春日

東京帝國大學圖書之印
明治三十六年十二月

新編草德目錄

巻之一第一 王者人命を救ひ福を成す
第二 揚敏成老母小者を恵く宝を得る
第三 祖父僧を救ひ報を得る
巻之二第一 子優鶴を放て小鼠を道事を得る
第二 朱孫子人を救ひ欲を捨て富を得る
第三 謝延恵起て人相を変じ福を得る
第四 程沖法徳をおこなひ名を変る
巻之三第一 子慶不義をなして福ひを失ふ

第二　鄒士信美人を要る事
第三　石純賓父乃俗を排ぞる事
巻之四第一　楊白之金を還して福を招る事
第二　鄒士信絨を買て救る事
第三　許徹曾奉を救る事
第四　曾閣人と約して孝を延る事
第五　曾徹法法と刎て冤を免る事
巻之五第一　薛志く乳母を棄る事
第二　黄得婿と約して禍を蒙る事

第三　蔣膏白玉を要る事
巻之六第一　宋明常天と約して棄を招る事
第二　趙作孝会して猫を招る事
第三　林雄義郎と改て再び立る事
巻之七第一　楊備城隍と侍て金を招る事
第二　秀蘭惠岸に教て法延を盟る事
第三　劉瑞月義と要る事
巻之八第一　黄孫孤と要る事
第二　郭珍母と智て義看小出る事

第三　弦之由雷小丸事
第四　孫彩華に書を送る事
巻之九第一　林高妖怪を拵へし事
第二　黄石之老狐小過る事
第三　謝源牡丹の精小を生る事
第四　簫氏夫の魂と結ぶる事
第五　葛休親の魂と結ぶる事

大明治代宣德年中小南京應天府乃内小刘貞外史

第一　王秀人代命と称人福変て梅と成しる事

いつの頃か有日酒宴と設き趙完と云人を招かんし趙完
云人乃相とんなる天下に双なき名人なり刘貞外邪
王秀と云小姓小酌とさしくもく已小酒高と始なる趙完
王秀が能と藝とさしく大に驚晴小刘貞外に若しく云
やう公式小姓王秀ゞ今日乃面相対外面し今き内小
必大なる福と差出し云よも能筆と叫ぶるものあるべきな
早く〳〵歌く半〳〵弦へぶうきをかくんば悔立所に到り
なんぬと云まこと、刘貞外聞くく戸なる小彼王秀云

幼女の时より画事に秀れたる妙なり。去ながら由
桐なるくせある猖吾身乃難におちようんる事惑なれど。
もろ前後も知ず任に急ぎ勝を遣さんとして朋輩日王秀が
嗔であへ容は右の様子を語り路に巡り出して賤しき門
からしきれば王秀幼法より多年馴染とりて
住みしてあれば是に通ひ宿りとして洞に隠て申ける
是我女なりとも由桐をして根なく偕者さとなすべからずとも
猶に住まて永く法恩を報じ侍らんかとして一向
殺を止遂に主人に別を告て出たり軽粉にして密し
し刹負外も是を見つ望に衰を催しぬ掴王秀

心中小せう彼趙光に人桐とあたなる事を国世に名人なり。
趙光既に此織桐にて出るからあからしや必ず蒼をなすかさしれしが
あるに稲を慕ひ出してすれみとあんまするとして緑憂殺
光叙の弟こて喜び出る路乃担漸にて星げれん
かくあくし時に便用を頼んかと歎び信をむんまで
光流あり居ぞくもを戸と用ゐるに米乃上に
一つの皮袋を吊くる王秀不審をひらき見て皮袋
を取り下して見る是を取る八月に天費目額の銀を
見るの天に向て人を遣る事なりと悦び此銀を携
立帰らんとして思ひしが偏に善心を起してとすかう。

古人の語にも富を絶ては貧を
憂と為しうる金銀財宝
尋常なる人わづかに衣食を
もとめてこれを求ず
きくまでとうり酒屋うり
ぶしきくに小さつと来り
あり問ふるに貧しうる
ちとくきびしまうとうつ
きこしまつ屋に小僧
こゝに自害をんふをぬしと
こゝに自害をんとらしは
未だ生平小さ
ちと走生平小さ

それば漢の云やう我そんの事ふ張と義一行の中
ふ立帰て先と思れたる人のるよ拾られぬ落を張ハ
主人乃恨なりと毎とひ屋敷ふ泊りとくゆと云分なるも
ものと令ハ主をけ給ひ一ふ分くを形るハ日
るもそ也思ひ極しゆへ此所ふ連よ自害と遂んと
いひも敵ぞ又論と云主し既ふ影ものしくと主秀
ひとを抱住ハ乃辞ふ附く同るを信を義し毎
ま張れ負敗を幾程ぞ又行とくを包ふ巻く先
とひうを之と以ぞ彼漢義く曰ハ我義を張を恨を
出百両利使銭九円ふ入き置ぬとく漢ふ行り名ハ主秀

先と学く我拾ひし所ハ浪を此人乃義を張に疑ひ
とて出て云ハ我今ハ武蔵と拾ひ張を義し
ものを人密類し不使ふに先と思ものを主ハ知ぬ
必定ハ其ハ義し給なりんふ為ものを云ハの漢
銭くとくく大よ信ひ先乃我銭をりたりと公ハ何人な
ぞ問くハ乃ぞ記大若んあり也今乃世よ人のあとうひ
らんかとを乃世乃と多ふに拾ひ張を思をんふ
ものを志し賊ふ世よ帝ものを貴人をり死くハ銭名を報
じ給へ主秀義く曰我姓ハ主名ハ秀と云者ものを
ぞ拾ひし恨と義ものを言んとを乃ふ

たゞしんや擲又右方の名をいふときハ彼濱が口拭る程寛し
ひとりありしハ隣郷の官人陳老爺と云人の家来なり先
對事の忙しきにまぎれて此銀を落しぬ然ば公正吏が
以て今是をかへし奉らバ家為に令の親なり故上こん銀
中をおて進らせまいらせし原主人の銀なれバ程ならんとひ
ま続かず公然我屋敷に留り事をも語へ吟事なども主人ゟ告ぐ
聊ハ敖命の恩を報ずべしやとぞ王秀は我免し銀
に至わらバ何とて来ひ受けや我又汝の屋敷へ行に
及ばずしも直に別れんとて己に立去らんとせし
不に程寛袖を控へて云やう公若銀とかへしなバ一盃

の酒を進んず是非とも我屋敷に来り給へとて邀て終
家に帰りて深く屋敷に至りしかバ程寛先内へ入て
主人に右の様子を語りしバ陳老爺大ひに其志を感じ
是ぞ真の善人なり我自ら對面せんとて則王秀を奥
に向かハ銀をかへしたるハ汝じが未だ年若けれバなり
かくのごとき大善ハ祖悦しきまゝ汝ハ何国に通る人
なる我も今時王秀の頭をおふ屋てやう来世円用なそ
叔父が方に赴んと欲する所に路次にて不図此人に出合されん
まゝ傍にありしも善き陳老翁の曰若き用に
ならざんバ我屋敷に逗留するよりて領に止まり酒宴を

設をくいなを結ぶとなくなくうたれる。主秀、聽ぶかずして、二三日
逗留してゆんずるを、彼ひ脚くとも、孫を給事之後
ものなるらんしつゝ又教育滞留を陳老爺をとゝり如何
人るまじき主秀が作ととゝく就んぶ思いまし、彼が風俗
様事にわゝで間ゝ大人の相ゝられうゝ孫ぶ吾ん
わゝ着るしいぶをぶ富貴ぶ添べし。我女玉園とゝく渠
ゝ配せゝ家賀八傳ちゞ子孫繁昌ぶ基なゝんゝく人
ん洗生事由ゝ云者と嫌ゝて主秀ゝ此ゝと云ゝ
しゝ主秀ゝと侍遣て孫こゝと辞ゝ名ゝ孫を
給事ゝ遂ゝ伏ゝ吉見ゝと探ん申ゝ

紀ゝと慎ゝる主秀ん申ぶ怪び双孔孔辛同者ぶ
嗜ゝ者ゝとわゝざしゝ已ぶ事ゝ年ゝ毎ゝ輝名ゝ武対ゝの相
人遊ん申ゝ云ゝしゝとゝ出ゝく犬ぶ元と疑ひ彼遊ん
ゝ人ゝ知ゝと見ゝるゝ天下に双ゝ名人ゝく彼ゝ主
ゝ一ゝも髪ゝゝゝわゝゝゝいゝゝ我ゝとゝくゝゝ問
ぶ猶ひゝゝんゝゝゝ今ゝく猶ひゝ治ゝゝゝ
ゝ思ゝ我ゝ犬ゝ渠ゝみゝて疑ゝゝゝんゝゝ
嚴ゝ輔ゝ孫ゝく許多ゝ名人ゝ彼ゝ吉主剣負外ゝ方ゝ
月舞人ゝ事門ゝ市きゝ負ゝ竹ゝく怪ゝ我未孫老爺
の一ゝに加人ゝ元ゝ主ゝ門遠ゝんゝいゝれゝば

五郎の同列員外若我に遇ぬ。則ち知るべしとて。已に小輪より下りて門に進入る。則員外立出て。元と迎へ我が仕し小性三郎の員外に帝小姫を娶てと延て堂に上り。是下いるるあるを以て。四郎の福と得ずやと問る小三郎答へて曰。我公小姫と婚姻を結ぶ道中小姫を負て行くるれば。則員外此福と結ぶ詳小姫を出し。乃浪り歓待ける。酒蒙なる小三郎下りる。小姫遂に人相とみる事一乃名今りと沙結ぶ。然る小我如何ん侯しとする。今小疑ひを生ずる。彼公姫を抱き抱へ乃如く小姫を取り。再び我相代みをしめる。安者と。びさんと欲宮ひるを。ひきとゝいで則員外乃曰我さそわるとく。驚る又遂に。と抱きされば。彼四郎再び小姫乃形小粧て。則ち砂とと利。諸く傍み居きり。時小遂三郎と。その大小ものさ。遂未だ下て頭と。北小つ。ものさ。小姫の面とをして。公子相あり。我畢緑乃方ゆ。て爭う公子則小郎。ん。ものさ。きハ。のゆ小。性乃浪。く砂小出。ものさ。孤。と柱子と。浪り。行。則員外。が曰是下。彼着と。ものさ。貌乃。貌と。出と。則相あり。

鶴文 巻二

巻一

心の結ー小性八使元なり何ぞ今亦公子の相あらんや。
趙簡子曰く善哉善哉吾聞く彼人の相とは仁に在り曰
の円小渦と差出たる相現きめらゆゑと諫うく勝と
遣つを遣らせり今又また人相とは明小公子乃相
あり其日の相とは自乃相也雲泥差あること等
懸なるを伯樂曰小渦は善根を積ふと云ふ
はまた相なりと語きと云ふ大感じく曰是下人の
相とは云ふ亦あり我別に善根を積ふ人ハ
なれを箇相とく申ふ
和寇が自害式敕ひ今又除老翁乃巻子になりしを

詳小稿りそれば趙簡子乃第一乃善根
とは云ふ少結とは古語小敕一人命勝造七級宝塔云中
乃ひとそれば人相八原心相小如ぞと云く善根とは悪相
家じて善おとり悪業とは八善相家じ悪
おしなる公人乃命と救ひ人乃ひゆゑ善根と云く面和
急と家ぞり向後孫善代を結ぶ孫を小也く栄
結とし諫とる結ふ孫乃事小因ー世ん相家と考
とは徳と切ハ必福有る道理なり古人乃語も
積善乃家ハ必餘慶積不善乃家ハ必殃と云へり
人心とは善く己とは古今小説に載く

第二　楊敏成母孝と貞と称する事

元の至慶年中に浙江といふに楊敏成といふ人有一人の
老母に事へ孝養を尽し貧窮と雖ども家貧と云へども
母に貧苦を嘗めしめず富る祿にして云やう家を
年八商賣小利を求て食を得て舞わう老母の色を
やつ〳〵早迷ひ〳〵さる。彼の母あくも遠慮なく作〳〵き
よりをいとむ母を心を尽さう不悦ひ汝を道化
ぬんば我御百ばかりとく問ひ思ひようる彼ひるを
くいひ出されるに楊敏成驚く老婆とちがひ二月迄
あのかなへどもいと事なし。晩方母今年八十餘りよ

しく衰老し。ある時敏生と付て曰ひるは我原
貧家小はまこしゆ給小食代を求
若老と頂て我小子ゆ我一生孝養中小移らんとて
飯代もつく彼ひ強けまば敏成容易背く曰母乃仰を
我意背く半ばらんや三月乃内小是代頂へ進ぜん
とく已に母乃前と退ひくん年ばかりつゆ我ばかりを
角とく今抜て掘とば年う頂へ屋とそと思顧ひ思
事ん志こうばかりなれ。年二月に南まる和代義中に
一人の官人来く敏成小向ひ曰やう汝誠乃志厚く
統く老母小仕へく孝ばかりと思ゆ我老と感じく此

まづ来れり。元より五里東に当て保善寺といふ寺あり。
寺乃上に小一の廟あり。廟に腐れ朽ちたる小又一つの祠あり。
祠と共に人掘り石乃櫃あるべし。其中に金銀の器あらん。元
我宝なるべども。汝小なれども人間乃世乃望とかるべし。必ず疑ふ事なかれ。
敏成乃敏成なるべし。慕つく出んとせし事乃夢忽然さめぬ。
清異乃ごとく侍しに。元亨天正と我に告示し奥義
なるべんと思ひ朝東に小起き。保善寺に詣り。腐
やけたる窺小異しく。其乃ごとく林中に一つの古廟あり。
敏成廟中に入て。神明に祈願とかるに。告示宜人と

夢に同じ。敏成深く感涙を出し。再び寺に出て腐れ朽
ちる小一つの塔あり。敏成掘んで塔に四五尺掘る
所に一つの石櫃あり。蓋を開きて見れば。
黒金くなりて。心中に感涙をなし。深く神明
の恩を謝し。宿乃東に帰りて。古器を取出
毋に与へ。毋乃ごとく掘れば。古器を取出す。
此年より猶と後二三年にして富人となる。敏成
言へ乃語るも。孝者必有福と神明乃示す事なり。看官人
と為給へ。古今小説に載せ給へ

巻三　程豊儒と殺して報と蒙る事

大明の永楽年中に蘇州といふ所に一人の僧恵國といふ
者ありけり此僧いまだ寺をもたざりければ一寺を建立せんと
おもひ多年倹約して銀五貫目貯へ置ぬ茲に又程
豊といふ者有て常に恵國と親しく交りけるが恵國が銀
を貯へたるを知りて何とぞして是を盗とらんと欲ひ
けれど恵國常に油断せざりしかば敢て盗むる術なし。
いかにしてかとらんと心をくだき思案をめぐらし漸一つの謀
を設ぬ。有日恵國が庵より遠からぬ所なる此郷に七里薗に
禅松村といふ村あり此村の内に靈寺あり和尚君茂を
賓とおもひ縁りて我宜くさりぬべき屋し恵國悦んで

云ふ禅松村ハ我原もとより知る所なり明日是へ下し給
行て其寺を一見し我ものにせんハ即時に是を嘱へける
しかるにかの五貫目の銀を持て程なく出立ぬ彼所へ
赴きける折しも禅松村といふ所ハ松柏多く茂り人家も
まれなりしかバ昼さへ物すごく強盗多くありし所なり漸く此所に到りし
程に恵國暫くためらひて思慮もなく行けるに
ま松林の内より大の男二人躍り出で時に恵國を捕へ
出して此所に酒肴を拵へ恵國にも酒を飲せ其
にあらで居けるに恵國も酒に満たされ
進む。故に悔返すもなく是を飲ぜ忽ち辨

きうくにすてゝおとしうんとそれを見るとたくさんの狼のこゑ
う動くるゝそれ程もこゝに涙ゝくゝ酒れ四ゝ蒙汗薬とつきて。
其毒小中ゝくるくるまわり。程もなくゝ倒ゝと成ぬ。
別勢ゝくゝ屍と落代倩小懼懼ゝと立寄見ゝ狼ゝ
ひ宿ゝ四ゝ面ゝ書ゝ書ゝ書ゝ書ゝ書ゝ書ゝ書ゝ
そのゝトくるくるたくさんひ狼ゝくゝ一旦富ゝと楽ゝ
いゝくゝくゝ見ゝ程ゝ手ゝぐゝくのゝぐゝきんゝや四ゝ
ゝゝんゝゝ酒ゝ小ゝくゝ涙ゝくゝる程ゝ紙
しゝくゝそゝう一ゝ成ゝもゝと教ゝくゝ一ゝよゝ小ゝ今ゝ見ゝいゝゝゝとゝくゝゝゝ。
書ゝ四ゝ代ゝ乃ゝ一ゝ程ゝ派ゝと生ゝ成ゝ小ゝくゝ懇ゝ小ゝ恵ゝ四ゝ和ゝ尚

と遁れさせるべし。其罪かしこ。一ハ滅をぶし。孤老とは言ふ順ひ。
一ハ孤泯と寺に送て出家とするぬ。さて母常に孤泯に告
て云ふ。汝を今年十五歳なれば宜く善悪とも暁べし。
汝が父は貪欲と肆まゝ恵国和尚に教へ立貫
目乃銀と奪れ給へ。ちまたに居く汝を出家なし。恵
国和尚は善徒とうしをんとうかうす。彼僧乃忌日に
を修と償ふ。其夏魂ふたなしを遁てをおりゆて云ふ
ようしと教訓をしかば孤泯母に言ふ。彼日忌日
年八宗ふ及ぶ。朝夕経を誦ふ。恵国乃ゆと弟ひ
ようとうに孤泯を書懐胎乃身となり。遂ふ又男

子を誕生ます。此時孤泯を父母乃銀と以て国乃銀と
俄ふ云へ。其名を孤泯と附ふ。月日乃ごとふ愛て。光陰箭の
ごとふ。孤泯已ふ十歳なり。母に大きに不孝なる
ようにぶりうを只父に入て不孝ふ。朝夕父を白眼
なる。子孫乃生れ出ふ。孤泯ふ。母を
ようく思ふ。孤泯が如き悪を拵ふ。遠ふ。ぱん年恵
国和尚と教をしを辞なんも。未ふ。あるべきと愁憂
遁ふん痛れ病と慈ふ。孤泯を
ようと思ふ。父大ふ怒ふ。孤泯を家ふ

至りて我と害をなすも掛ぐるに去来すると出さんとて、
抗州の高客周庚常と云人よりの周庚常甚だ怪しく
思ひ、高貴の人と彩へ、こゝに怪を聰明にして共道に
達し能く生貴とのたまへ庚常屋敷情低加へ第
一の客者なれば、どうぞこの家に入るべと折まを怪を
始終相のうつゝに能主人よりは早二十位ばかりなる周庚
常の女小當世は乾なる美人なり。抗州の名を呼
及び始よりれんとおもはれしうを公用繁くして
延るに折ることなれば彼怪を去せ慈慕して時々人と
よろこれを女文小兼にそなるうと

怪を去せと彩へ客小立退んと割り有る人静と
関小思ひつゝ女と一刀頃已小逃わんとせ一方小人の差い
まご聴ゝ怪を抱ゝ屋を賊と呼るゝ家内
の男女悉く数を若松川と點ゝ怪を賊と笑
ゝ怪を怪を周庚常大小怪んで怪を問うと
ゝけり付小関乃門小突ゝ頻るうれしのまを驚て関
小入ゝ女力赤と神ゝ暗小ゝ庚常者ゝ仰天
ゝ菓と開ゝ級と問ゝ女怪の事と聞ゝ怪を
乃小砂ゝ若れば庚常大小怒ゝ怪を言ゝ

朝官府より召く新と称へ給へ共、大きなる怪しき
とつくづくと思ふに、周慶常々の女、国中に双なき美人也
聞ける故、我さきにと迎へ取ん為に、あにかの兄と称
し、社長以奇怪なる羅小行ん、と決定して
曰ひける、相続者に三人あり、一人は
女と雇ひ、乃従者と成る羅小行、と蘇別は
守の使者と造しく父と見なして、斬羅小を
こそ、と思ひ、使者と蘇別乃去守よりけるく
乗物と行くれば蘇別乃去ると笑く、誠に羅小行
とく、従者の父狂豊弟に彼羅小行と捉へ、

抗別より遣ると、とて小抗別乃太守、従者より三人と、斬羅小
行しるふ、仲作等、三人は曰くしく、彼羅小行、先、狂
さて、と、彼、ぬ、年七十位成り、対小行、成石
ん、知る小、問くと、彼、と、陽る、ば、我、と、
果、報れ、と、諸見ん、小告ゆと、思、とて、
義、とて、むべ、乃親兄中、れ、迎、言、と、
ば、恵、国和尚と、彼、と、奥小、語り、今日、従、彼、僧乃三十
三年、高、より、南、まり、城小、国果れ、石、捉、も、脱、
で、我、公、代、羅小、行、ん、中、原来、こ、と、故、ず、
悔る、ば、と、父小、日、り、と、羅、と、懺悔、し、法、人、

小舟とこぎ出でゝ。雲とこゝろ。うんがるなりと。大音聲
よばはりつゝ。ゆくゑ。はるかに。流しゝこゝろ。
人もしれぬと。ゆくゑ。はるかに。海門。うかゝとゝ。名殘と。後の世
ゆゝ。あはれ。皆。新恋。思ひ。理。ゝ。岩根。とゝ。ふみ。新。
同。看官。ゝと。嘉。ゝ。淳。ゝ。さ。ゝ。に。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ふ。ゝ。侍。る

新編草之巻之一終

新編草之巻

八